Viator

VOL.29

祝カトリック聖ヴィアトール北白川教会
創立 70 周年

創立 70 周年に寄せて

北白川教会主任司祭ウィリアム神父

カトリック聖ヴィアトール北白川教会の兄弟姉妹のみなさん、私たちはこの小教区の保護聖人である聖ヴィアトールを祝う準備を行い、小教区は 70 年間の教会活動を告げ知らせます。私たちの教会は 2001 年 10 月 21 日に 50 周年を祝いました。なんとすばらしい歴史でしょうか。数多くの人々が教会を作り上げ、また信仰を証ししていきました。

私たちはこのように誠実な信者のみなさんを誇りに思います。今日、神のことばをどのように告げ知らせ続けることができるのでしょうか。また人々から信頼され、人々を魅了する証し人であり続けることができるのでしょうか。この世界を変容させ、この世界が神の望まれる国となるようにする道に関わるキリスト者とはどのような人々でしょうか。神の国とは真理と自由、正義と愛の支配する国です（ヨハネ 23 章）。

私たちは洗礼の時に聖霊を受け、聖霊により祭司、預言者、王になっています。したがって、私たちの責務とは、キリストにならって現代世界のなかでこのような教会の役割を生き生きとしたものとすることです。私たちの担う王職とは、神から託されたこの世界に奉仕し、世界をより正義にかなうものとし、より兄弟愛に満ち、平和にすることです。

私たちの預言職とは、御言葉を運ぶものとなり、

この社会での希望の証し人となることです。私たちの社会は本当に希望の証し人を必要としているのです。そして私たちは洗礼によって、奉仕と証しの生命を神に喜ばれる供え物として捧げる恵みをいただきました。神に捧げるものとは、都会のなかでの労働であり、家族であり、この世界への関わりであり、愛の分かち合いです。私たちは、神を父と認める娘であり、息子であり、祭司であるのです。私たちはみな神から与えられたこの使命を果たすことができますし、その呼びかけに厳かに、また誠実に答えることもできるのです。神は御国を作り続けるために私たちを必要とされるのです。

本日の記念日を振り返るとき、私たちに先立ち、70 年前から信仰の道を忠実に歩み続けた人々のことを思いおこします。私たちの世代は幸いなことに、みな勇気を持ち、大胆に生き生きとした教会であり続け、「福音の喜び」を生活の場で勇気をふるって宣言することができるのです。なぜならば、私たちカトリック聖ヴィアトール北白川教会は勇気を持って語ることのできる教会だからです。

勇気を持って希望を語り、勇気を持って分かちあいや兄弟愛を示しましょう。勇気を持って、教会をこの世界に開き、世界にいっそう奉仕しようではありませんか。

この記念日は小教区を振り返るよい機会であり、これまでの歩みを見通し、将来に向けてとるべき道を考える機会なのです。私たちはどこへ向かうのでしょうか。私たちはどのような展望を持っているのでしょうか。いま私たちは兄弟愛の年をすごしています。10 月 21 日が兄弟愛をたたえる日となり、勇気を持って一致を強め、門をたたく人々を受け入れる日となりますように。

ある過去の思い出—真の宣教は喜びである

（2008 年 9 月付、カテキスタのステファニアと受堅者たちへの手紙）

リノ・ベリーニ神父

親愛なるステファニア、

こんなに遠く離れているのに、それにポッジョ・サン・マルチェロに住んでいたのはずっと昔のことなのに、あなたと堅信を受ける子どもたちにお便りできてうれしいです。

宣教師というのは好奇心旺盛な人たちです。その中には、どんなタイプの人もいるし、どんな身長の人もいます。一人一人みんなちがっていますが、一つの共通点があります。それは、ある日、とてつもなく美しいものを見つけて、心をいっぱいにした、ということです。そこから、自分の目で見たものを周りに伝えに行きたいという願いが生まれました。

宣教というのはそんなものです。どの宣教師の心もいっぱいにしておわらないもの、過ぎ去る時間とともにますます美しく深くなるもの、命をさしだすかいがあるもの——それはイエスさまです。宣教とは楽しいことなのです。私がその宝物を見つけた場所がわかりますか？私の心を驚かせ暖めつづけている宝物を？それはポッジョです。小教区の教会と、みなさんが受堅式をした御助けの聖母の教会のあいだです。

日本に来てもう 40 年になりますが、そのころの時代や大切な経験をよく思い出して懐かしい

です。たとえば、侍者をしましたが、母は、小教区主任司祭と宣教師たちをえこひいきしないために、毎日曜日に二回奉仕をさせました。一回はドン・サヴィーノ（当時の私たちの小教区の主任司祭はそう呼ばれていました）の小教区で、もう一回は宣教師たちの教会で侍者をした。午後も聖体降福式（ベネディクション）で同じことをしました。二回の聖体降福式のあいだは、伝統的なボールゲームでした。

ザベリオ会宣教師たちは、世界の他のどこよりもポッジョで愛されていました。そして、イエスさまに命を捧げた人々と、何十年も中国ですごした年寄りの宣教師たちが当時私たちにどんな話をしてくれたか―あなたには想像できないでしょう。彼らの話を聞いて、大きな理想にささげる人生だけが美しいことがわかったし、とても楽しかったです。

日本に向かう道を歩むことを私もそんなふうに考えています。親愛なるステファニア、人生は何となく過ごしていても意味がありませんが、理想を抱くと意味あるものとなります。私の宣教生活は、アジアの偉大な諸宗教、とくに仏教に関係する特別な活動となりました。

教会の司祭としての仕事に加えて、人生の長い年月を過ごしてきた人々といっしょにいます。そして、ポッジョで、とくに聖ニコライ教会と御助けの聖母の教会のあいだで見つけた大きな喜びを伝えようとしています。

毎週木曜日（当時は休日でした）にはドン・サヴィーノといっしょに、お年寄りたちに御聖体を運びました。もちろん、歩いていきました。行く途中は沈黙でした。彼は祈っていましたが、私は、村では見られない石やハーブや大きな葉っぱを眺めていました。それもまたおもしろかったです。イエスさまと御聖体のそばで沈黙を学ぶと、数えきれない美しいものが見つかって、すべてがそれまでとちがった新しい仕方で見えてきます。

あなたの病気のお祖母様のこともおぼえていますよ。ベッドサイドの小さなテーブルには、白いテーブルクロスをかけて聖体拝領の準備がしてありました。家の人たちも仕事を止めて集まっていました。聖体拝領の後は、自家製パンとおいしいサラミのスライスも出してくれました。ドン・サヴィーノは一度も口にしませんでしたが、私は歩いた後でしたからね。ひょっとすると、親愛なるステファニア、あなたの家の上等のサラミも、私の宣教師の召命を養うのに役立ったにちがいありません。今でも私が一番好きなことの一つは、病気の人に聖体を運ぶこと。日本ではサラミは出てこなくてもね。

日本であった一つのエピソードについて書きましょう。一度、小さな村の仏教のお寺で話をするように頼まれたことがあります。そのお坊さんは私のことが気に入っていて、キリスト教の話も何度もしてあげたことがありました。檀家の人たちに話をするようにということでしたが、私も知らない人たちで、どう話を始めたらいいのかわかりませんでした。私は、神父たちが病人を助け御聖体を運ぶという話から始めました。私の父につ

いて話しました。霊的に深い人でしたが、病気と死に向き合うことになりました。彼らは耳を傾けていました。

そのお坊さんは、主日ミサがあるキリスト教徒がうらやましいとよく私に言っていましたが、その時もそう言いました。話の後、彼の奥様が自分も癌だと私に打ち明け、よい死を迎えられるように助けてほしいと私に頼みました。それで、何度も病院に見舞いに行きました。昨夜は、彼女の親戚から、いっしょにいて祈ってほしいと頼まれました。

私たちは天国で美しいものを見ることができると思いませんか？

(https://dg.saveriani.org/images/comunicazioni/pubblicazioni/defunti/profili/2020/inMEMORIAM2030-Bellini.pdf より、翻訳は広報部。画像は commons.wikimedia.org/wiki/File:Vista_Poggio_san_Marcello.jpg)

✝✝

編集後記

この教会は聖ヴィアトールに捧げられた教会で、聖ヴィアトールの記念日は10月21日。それで、例年そのあたりの日曜日にヴィアトール祭を行うことになる。というと、10月の第3日曜日になる。ところが、10月の第3日曜日はカトリック教会としては世界宣教の日である。しかし、ヴィアトール祭の勢いに押されて、世界宣教の日を意識する人はうちの教会では少ないのではないだろうか。

世界宣教の日というと、昨年帰天されたベリーニ神父様の子どもの頃は、宣教のために外部から講師を呼んだり寄付を集めたり、活発な活動が行われていたそうだ。神父様としては、この教会でも何か宣教のためにしたかっただろうが、少なくとも私が知っている頃は遠慮して、ホームページに関連パンフレットを載せるぐらいだった。

よりにもよって、ヴィアトール祭の日と世界宣教の日がぶつかるなんて、と思うが、とにかく、宣教のために何か今号に載せてもいいだろうと考えた。ベリーニ神父様は今のパパ様の使徒的勧告『福音の喜び』の勉強会を広報部員のために指導して下さり、たくさんのことを教えてくださった。そのエッセンスは、宣教とはイエス様の美しさに打たれて他人に伝えざるをえないということだろう。それを記した神父様の文章がザベリオ会のサイトにあったので、イタリア語から翻訳し、今号に掲載させていただいた。

この文章には、宣教師として日本に来られ京都の地でこの世の命を捧げ尽くされた神父様の原体験が書かれている。私たち一人一人にはどういう体験があるだろうか。私たちは毎日曜日の福音に打たれているか。宣教はすべてそこからなのだろう。

ある時、神父様は「私は、聖ヴィアトールについてもいい話ができる、黙想会に呼んでもらえたら」と言われた。大きくうなずいた私だったが、その機会はもうない。しかし、今ごろ、神父様はもう聖ヴィアトールにも聖ザビエルにも会っておられるだろうか。

（マリア・ヨハンナ M.M.）

カトリック聖ヴィアトール北白川教会　2021年10月17日発行
ホームページ：https://www.stviator-kcc.org/